

「死を悼むイエス様」

ヨハネの福音書 11 : 32 - 36

November.1.2020

ヨハネの福音書 11 : 32 - 36 (パワポ)

Preface

私の父が 87 歳で亡くなってから、7 年が経ちました。

父が亡くなってから、帰る実家も無くなってしまい、寂しくて仕方ありません。

それまでは、2, 3 ヶ月に一回は子どもたちを連れて、東京足立区西新井のアパートの 1 室の実家に帰って、母の作るご飯を食べて、子供たちはおじいちゃんやおばあちゃんから、少しのお小遣いをもらって (私も貰って)、癒しと慰めと励ましのある時間を過ごして、土浦に帰ってきました。

今、生活をしていて、時折、家内と一緒に寂しいなあと思うのは、すぐに帰ることの出来る実家が無いということです。

また、父が亡くなってから 7 年間、4、5 回、父が夢に出て来て、父が出てくると毎回、私が父のことを抱きしめて、「お父さん、会いたかったよ。」と大泣きしながら、起きたりもします。

その度に、父が恋しくて、心底会いたいと思っている自分を発見します。

これまで、何度かお話してきましたように、私は、父が 50 歳の頃に生まれましたので、周りからは、父と子というよりも、おじいちゃんと孫のように見えることもあったようです。

父は、そのことが嫌だったのか、「ああ、おじいちゃんと一緒に買い物に来たのね。」なんて言われた日には、そのお店には 2 度と行かないようなこともありました。

でも、子である私は、物心つく頃から、父が高齢で、恐らく友達のお父さんたちよりも、早く亡くなるだろうなあと思っており、父の死をずっと覚悟していたようなところがありました。

「僕が 20 歳になったら、お父さんは 70 歳、僕が 40 歳だと 90 歳。最低 90 歳までは生きて欲しいけど、生きられるかなあ…」という風に、父には長生きして欲しいけれども、それは叶わないことだなあと、思っていました。

父も母も、明らかに友達のお父さんやお母さんたちよりも、足腰が弱っていて、アパートの階段の上り下りも、私が小さい頃から大変でした。

だから、大きい荷物は、私が家にいる時は必ず駐車場まで走って行って、アパートの2階の部屋まで持ってきてました。

高校1年生の夏休みの時には、父と母が、韓国に2週間ぐらい妹と一緒にいたのですが、その時、心底願ったのが、「関東大震災級の地震が来ると言われているけれども、頼むからお父さんお母さんのいない今、来てくれ。僕だけなら、何とか逃げ延びることが出来るけど、お父さんお母さんの足じゃ、逃げられないし、死んじゃう。」ということでした。

それぐらい、いつも、両親の、特に父の死がいつ起こってもおかしくないと思っていました。

それだけ覚悟していた父の死ですが、いざ父が亡くなると、やっぱりさみしくて仕方ありません。

もっと正確に言いますと、父が病院で亡くなった時には、「ああ、小さい頃から覚悟していた来るべき時が、ついに来た。イエス様のおられる天国に行くんだから、悲しくなんてないし、大丈夫。」と思い、父が亡くなった直後は、一切泣かず、大泣きしている母と妹を、生意気にもいさめたりしていました。

しかし、一人になると、寂しさと悲しさと申し訳なさが湧いてきて、涙が止まりませんでした。

亡くなってからしばらく、父の遺体をピスガに安置していたのですが、葬儀になるまで毎日、父のところに行き、亡くなった後も唯一柔らかい父の耳を触りながら、一人で泣いていました。

寂しくて、つらくて、たまりませんでした。

その時初めて、覚悟をしても辛いのが、愛する者の死だということを体験したと思います。

Part One

また、ここ最近、つくづく思うのが、「死ほど、人にとって悲しいものもなければ、辛いものもない。」ということです。

先ほど、父の死は、幼い頃から覚悟していたと言いましたが、子供が生まれてみると、子供の死を覚悟することなんか親には出来ないということを知りました。

私が、子供が生まれてから、祈るようになった事柄があります。それは、「神様、お願いですから、本当にお願いですから、私よりも子供たちが先に死ぬようなことは、決してないようにしてください。」という祈りです。

今でも、思い出すたびに、この祈りをします。

それぐらいに、子供の死は、親にとって、胸が張り裂け、身を引き裂かれるようなことだということを感じます。

時々、どれだけ父親である私のことを、我が家の子供たちが好きなのかを確認したいという思いに駆られて、子供たちにちょっとこんな意地悪な質問をします。

「お父さんが死んじゃったら、どうする？」

すると、長男の恒一と三男の雅論は、本当に悲しい顔をするんです。

(長女の愉民と次男の詩穂は、また、馬鹿なこと言っているという雰囲気を感じます。)

長男は、高校生なので、表情だけで、言葉には出さないのですが、三男の雅論は、「ダメ。絶対に死んじゃダメ。僕の子供が生まれて、またその子供が生まれるまで、いや、本当はずっと死んじゃ嫌だ。」って言うんです。

で、その時の表情が、もう何とも言えない辛いような、さみしいような顔をするんです。

そんな言葉を聞くと、「ああ、家族と死をもって、別れなければならないということほど、辛くて、寂しいことはない。」と、胸が締め付けられるような感覚を覚えます。

子として親の死を体験することも悲しいですが、親として子の死を体験することを考えますと、死という悲しみ、辛さ、痛さ、やるせなさが、より生々しく迫って来ます。

そして、死こそ、人の力ではどうすることも出来ない悲しみであり、すべての悲しみの根源であるということ、ひしひしと感じ、思い知らされます。

Part Three

先ほど読みました聖書箇所にも、愛する家族の死を悲しんでいる姉妹が登場してきます。

マルタとマリアです。

今、マルタとマリアは、愛する兄弟ラザロが病気で死んでしまい、深い悲しみに陥っています。

そこに、イエス様がいらっしゃって、イエス様も涙を流しながら、悲しまれました。

なぜならば、イエス様にとっても、死んだラザロは、愛する存在だったからです。

ヨハネ 11 : 5 を見てみますと、

ヨハネの福音書 11 : 5 (パワポ)

とあります。

イエス様は、死んだラザロと、その家族であるマルタとマリアを愛しておられました。

そして、愛するラザロが死んだことを悲しまれて、涙を流されました。

イエス様も愛する者の死を、悲しまれました。

もっと言いますと、イエス様は、すべての人の死を悲しまれる方であり、人が死ぬということを当たり前のことだと思っておられない神の子であり、神の現われであり、神の御姿なる方です。

イエス様こそ、人の死を誰よりも悲しみ、誰よりも納得がいておらず、誰よりも何とかしたいと思っておられる方です。

聖書は、私たちすべての人間は、どの被造物とも違い、唯一神のかたちに創造され、唯一の神の愛の対象であると言います。

そして、神のかたちに造られた最も大きな特徴が、神が永遠であられるように、人の命も永遠であったということです。

しかし、人間自ら、神の愛の対象であることを軽視し、神の愛の対象であることを捨て去り、神を裏切り、神から離れ去って、罪人となって、死に行く者となってしまったと言います。

つまり、私たち人間が、本能的に持っている死に対する納得のいかない気持ちは間違いではなく、むしろ、本来死ぬ者ではなかったのに、死ぬる者になってしまったことに対する違和感の現われです。

先ほども言いましたが、私たち人間にとって、最も悲しいことは、愛する者の死です。

人生にあって、悲しいと思えることは、数えきれないぐらいありますが、究極

的に突き詰めていきますと、人にとって最も悲しいことは愛する者の死です。

死ぬことは当たり前だと思い、思わされていますが、仕方がないことだと割り切ることが出来ないのが、愛する者の死です。

映画やドラマを見ますと、人の命をいとも簡単に奪う冷酷で無情な人であったとしても、自分の愛する者の死に対しては、特別な感情を抱き、深い悲しみに陥り、涙を流します。

誰もが、愛する者の死を悼み、本能的に人が死ぬことを納得できていません。

そして、イエス様こそ、人が死ぬことを、誰よりも納得できていませんでした。

どれほどに納得が行っていなかったかと言いますと、
死の原因である私たち人類の罪の身代わりとして、ご自分が犠牲になって、十字架に架かれるほどにです。

そして、その十字架の贖いが私の罪のためであると信じる者には、永遠のいのちを与える・回復させるという約束を成就するほどに、人が死ぬことに納得できていませんでした。

ローマ人への手紙 5 : 6 - 8 (パウロ)

実にイエス様は、私たち罪人の死を誰よりも納得せず、私たち人類のためにご自分の命を献げ、永遠のいのちを確約するという神の愛を表してくださいました。

Part Four

聖書を見ますと、私たち人間がかかっている最も深刻な病は、死であると教えます。

癌や、脳卒中や、肺炎のような死因となる病気があるから、死があるのではなく、死があるから病があると教えます。

つまり、すべての病は、死ゆえに生じる症状です。

また、この地上の死は、病による死ではありません。

殺人、戦争、事故、災害、自殺と、死に至る要因は様々ですが、どんな方法をもってしても、死を避けることは出来ません。

そして、避けることの出来ない死を前にして、私たちがせめてもの慰めを得よ

うとするのは、死に方に優劣をつけることです。

殺されるよりも、重病であったとしても徐々に死んでいく過程のある死に方の方が幸いであって、事故や災害で突然死ぬよりも、寿命と思われるものを全うして死んでいく方が良いと、思っています。

聖書も、死に方の優劣については、ある程度認めているように見受けられますが、究極的には、死に方に優劣はなく、どんな形であれ死ぬことこそが、人にとって最も大きな問題であり、悲しみであり、神様が何とかしたいと思われ、何とかしたのが、死だと言います。

そして、死に対して、神様が何とかしたいと思われ、何とかした現われが、イエス・キリストです。

ヨハネの福音書 11 : 33 を見てみましょう。

ヨハネ 11 : 33 (パワポ)

とありますが、

ここの箇所は、兄弟ラザロの死を悲しんでいるマルタとマリア、また友人たちが泣いている姿を見て、イエス様が、死を前にしてジタバタしている人たちに対して憤っておられると解釈されがちなのですが、

誰よりも人が死ぬことに対して納得のいっておられないイエス様が、死を前にしてジタバタし、悲しんでいる人たちに対して憤っておられるとは考えにくく、むしろ、「愛する者が死ぬ」という死そのものに対する憤りであり、また、死を悲しんでおられる人たちに同調しているを見た方が妥当だと思います。

つまり、「死」そのものに対して、また人を死に至らしめる現状に対して憤っておられるんです。

だから、涙を流されるほどに、悲しまれたのです。

Part Five

この後、イエス様は、死んで墓に葬られて、4日が過ぎもう臭くなり始めているラザロを生き返らせます。

ヨハネの福音書 11 : 38 - 44 (パワポ)

死んだラザロが、イエス様の呼びかけに応じて、生き返りました。

ここまで露骨に、死んだ人を生き返らせるということをもってしてまで、イエ

ス様が示したかったことは、

唯一まことの神が実存され、その神が人を愛し、神の愛から逃げ罪人となって、人は死を自らの身に招いてしまったけれども、それを良しとはせず、イエス様を罪の身代わりとして十字架に架け、そして、永遠の命の回復とその命を与えられたことによる復活が本当にあるんだということです。

特に、この後、イエス様は、実際に虫の息になる程にむち打たれ、十字架に架けられて行くのは、今、このラザロに起こっているようなことをあなたがた全員に起こすためだということを示したかったのです。

ヨハネの福音書 11 : 4 を見ますと、イエス様がラザロの復活を、神の栄光だと言っているのですが、

ヨハネの福音書 11 : 4 (パワポ)

私たちは、栄光、または、神の栄光と言いますと、尋常でないほどの光り輝く何かこう荘厳な物体のようなものを思い浮かべがちですが、

ここで言う栄光とは、人が到底考えだすことも出来なければ、万が一にも考えたとしても、到底成しうることの出来ない神ご自身であられるイエス・キリストを十字架に架けるといふ、神のみぞ実現できる最高の知恵と、最高の誠意と、最高の愛、

かと言って、光り輝く何か宝石のようなものではなく、誹謗と中傷とむち打ちと茨の冠と血まみれの姿と残忍なほどの死を動員して、人を死から命へと贖いだすこと、これが、神の栄光です。

私たち人間が考えるけばけばしくて、浅はかで、張りぼてのような栄光とは、一線を画すどころか、全くもって相容れない泥臭く、血生臭くも、底なしの深い愛情に満たされた温かい栄光です。

その前に、私たちが出来ることはただひとつ、その栄光の前に降伏降参することしかありません。

Conclusion

イエス様は、一人の愛する友人が死んだことに、憤る程に悲しまれ、泣きました。

そして、その悲しみの連鎖を断ち切るために、神の御姿であられる方が、そのようなことは決してあり得ないとは考えずに、いや、本当はあってはならないこ

とですし、あり得ないことですが、そのあり得ないことを超越して、命の道を備えてくださいました。

今日は、召天者記念礼拝で、先に神に召され、永遠のいのちを与えられ、天の御国で与えられたその命を喜んでいる家族のことを思う日ではありますが、

私たち自身も神に愛される者として呼ばれ、神の子とされ、やがて時が来て、神に召され、天の御国で神を父と呼びながら、与えられた永遠のいのちを享受し、家族と再会できることを待ち望みつつ、

神との栄光の交わりを喜ぶ、備えられた命の道を歩んでいこうではありませんか。

お祈りいたします。

祝祷：ローマ書 5：8